本太中だより

令和７年２月２８日

第12号

さいたま市立本太中学校
０４８（８８６）４３０５
http://motobuto-j.saitama-city.ed.jp
E-mail　motobuto-j@saitama-city.ed.jp

支援者として有能になるには
「どうしてほしいのか」を考え、伝え合える関係

校　長　田中　一秀

早いもので、今年も３年生が希望を胸に本太中を巣立っていく時期となりました。私が３年生と過ごしたのは１年間だけでしたが、授業での真剣な姿、部活動の大会等での直向きに頑張る姿、生徒会や委員会活動での意欲的な姿、修学旅行や体育祭、合唱コンクール等の行事での力強い姿･･･どれも、その都度感心していました。３年生には、自分の信じた未来に向かって、自分らしく、自分の力で歩んでいってほしいと思います。

２月は、校外学習がありました。２年生は、２月７日～９日、舘岩自然の教室を行いました。今冬は降雪量が多く、自然の雄大さと厳しさを感じました。１年生も、２月７日、上野・浅草の校外学習を行いました。校外学習をとおして、生徒はさらに一回り大きくなったと思います。

さて、以前読んだ本*の次の部分で考えさせられたことがありましたので、紹介します。

> 毎日厖大な量の宿題やレポートがあり、集中してやっている時には自分の部屋には入らないようにしてほしいと奥さんと子どもにお願いした。そう頼んで間がないのに、部屋に子どもが来た。「父さんは忙しいので、頼むから、この部屋から出て行ってくれ」と（怒鳴ったわけではないが）懇願した。

皆さんならこの父親の対応をどう考えるでしょう。私は、この父親の行動が理解できます。そして、自分がこの父親と同じ状況であれば、同じ対応をすると思います。この話は次に続きます。

> 後でわかったことだが、子どもが母親とも相談して、これからベッドに行くタイミングで、「パパ、がんばってね」、「パパ、おやすみ」と、励みになり、ほっとする一言を言いに来ただけだった。一目、子どもの姿を見て、うれしい一言を聞いて、子どもながらの思いやりや激励に感謝しつつ、「おやすみ、ありがとう」と言うべきだった。

この話のように、相手の気持ちを考えずに対応してしまい、後で後悔することがあります。また、親切心から、あるいは、相手の助けになるつもりでとった行動が、実は相手にとってはそうではなかったということも多くあります。私もこのような経験を数多くしており、その都度反省、考えてきました。人を助けるためには、助ける人のことを、その状況を含めよく理解することが大切です。そして、「どうしてほしいのか」を考える、聞いてみること、また、自分が「どう感じたのか」「どうしてほしいのか」を伝えることが、良い関係を築いていくためには必要だと思います。

この話から、改めて子どもとの接し方について考えてみると、私たち大人は、今は手を差し伸べる時なのか、見守る時なのか、どこまで助けるのかと考えながら子どもと接することが大切だと思います。自身の子育て（多くの反省と学びがあった）の経験も含め、子どもの先回りをしない、自分の子どもの時と比べないことが大切だと学びました。子どもには無数の可能性がある。私たち大人がやることは、子どもの前に立って引っ張るのではなく、後ろに立って子どもの姿を見ながら背中を少し押してやることなのではないでしょうか。

今年度は大変お世話になりました。来年度もどうぞよろしくお願いいたします。

＊エドガー・シャイン　「人を助けるとはどういうことか」
引用部分は、監訳者（金井 壽宏）解説